

学位論文審査の概要

博士の専攻分野の名称 博士（医 学） 氏 名 笹森 徹

主査 教授 生駒一憲
審査担当者 副査 教授 岩崎倫政
副査 教授 寶金清博
副査 准教授 矢部一郎

学 位 論 文 題 名

Validation of the Treatment Strategy for Spinal Dural Arteriovenous Fistulae Based on the Long-term Outcome（長期予後に基づく脊髄硬膜動静脈瘻に対する治療戦略の検証）

脊髄硬膜動静脈瘻（spinal dural arteriovenous fistulae (SDAVF)）に対する治療方法の選択は、今日も各施設の判断に委ねられ、明確なガイドラインは存在しない。今回の研究では、血管内治療を第一選択とする治療方針の妥当性を、過去 16 年間の治療成績（50 例、平均追跡期間 81.2 ヶ月）に基づいて検証した。初期治療の根治率は、既報と同様に、手術が、塞栓術を有意に上回った。長期予後に関しては、歩行機能、排尿機能、ADL のいずれにおいても、既報と同等な改善率が示された。また、初期治療の違いによる機能予後の差は認められなかった。さらに、多変量解析により予後因子を検討した結果、あらゆる機能予後が、治療前の重症度に最も影響を受けることが示された。

副査の岩崎倫政教授からは、多変量解析の手法について質問がなされた。副査の矢部一郎准教授からは、治療時期による成績の違い、神経症状の詳細、発症から治療までに要した期間と機能予後との関連について質問がなされた。主査の生駒一憲教授からは、治療前の重症度と機能改善の度合との関係、またリハビリの機能予後に及ぼす影響について質問がなされた。副査の寶金清博教授からは、手術失敗例の詳細、頭蓋頸椎移行部病変に対する塞栓術のリスクおよび根治率等について質問がなされた。いずれの質問に対しても、発表者は、本研究結果で得られた結果や、過去の論文等を引用し、おおむね適切に回答した。

この論文は、独自の治療戦略による SDAVF の治療成績を、既報と比較しても遜色ない症例数と追跡期間で検討している点で高く評価され、機能予後において、手術治療との同等性が示されたことにより、今後、血管内治療を第一選択とする本治療戦略の普及が期待される。また、多変量解析を用いて予後因子の解析を行った点も高く評価される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ申請者が博士（医学）の学位を取得するのに十分な資格を有するものと判定した。